

藝林史評 ⑨

「神話から歴史へ」の道筋

日本の歴史学界も、戦後六十数年間に大きな変化をとげてきた。たとえば、中央公論社が昭和四十年（一九六五）から出した「日本の歴史」全三十巻は、著者の多くが戦後流行の唯物史観と距離を置き（たゞ一部に例外あり）、歴史と人物の動きを活写して、空前のベスト・セラーズになった。

あれから半世紀近く経った昨秋、講談社が「天皇の歴史」全十巻を出し始めた。各時代の天皇（朝廷）を軸に据えて日本全史を描く、という画期的な試みである。いわゆる「天皇制打倒」を意図したような論調の盛んだった往時には、夢想もできない企画として、注目に値する。

とはいえ、学界も論壇も、本当に変化・発展しているのだろうか。たとえば、前記「日本の歴史」第一巻は、井上光貞東大教授著「神話から歴史へ」という魅力的なタイトルであったが、今回「天皇の歴史」第一巻も、大津透東大教授著で全く同じタイトルとなっている。

もちろん、その中味には、近年の考古学や古代史学の多様な成果が盛り込まれており、大津氏は「大化前代」を従来の研究者より評価して、「天皇」号の成立も、天武天皇朝でなく推古天皇朝と認めておられる。

しかしながら、初期の皇統譜には否定的で、『古事記』等の崩年干支を「後世の推しあて」とみなし、「七世紀前半の推古朝において、神武即位・建国年次が決められ」「欠史八代は、のちに追加された天皇である」「たとえ崇神を實在の天皇だとしても、そこから応神へいたる系譜は、さまざま

修正・潤色が加えられた」のだから、結局「応神天皇以降の『帝紀』すなわち皇統譜は一定の史実にもとづいている」という井上博士説の域を殆ど出していない。

けれども、昨秋本会の学術大会で見学・討議した、三世紀前半と推定される纏向遺跡の遺構が、記紀の伝える「師木水垣宮」「磯城瑞籬宮」ならば、崇神天皇（崩年戊寅＝二五八年）と大体符合することの史的意義を、より積極的に論じてほしい。大津氏も「大和政権―律令国家の本拠地が：：一貫してヤマトであった」とみなす和田萃氏説を引き、「ヤマトの地名は：：三輪山のふもとを中心とする地をさす」と認めながら、崇神天皇との関係には言及されていない。

この点、たとえば、かつて大化改新否定論を唱えていた原秀三郎氏は、田中卓氏説を活用し、荒木俊馬氏説（昭和二十八年刊『天文年代学講話』）も援用して、「神武東征というのは西暦紀元元年前後ということになる」（平成十六年刊『日本古代国家の起源と邪馬台国』）とまで明言される。また、日本を離れニュージーランドで研究を続けた角林文雄氏は、同十七年刊『日本国誕生の風景―神武・崇神・タケル伝―』（稿選書）の寄贈添状に「国の始まりといえは：：神武が建国したとする以外に説明できない」と書いておられる。

しかも、田中博士は既に半世紀以上前から、記紀の伝える高天原より葦原中国への数次にわたる降臨神話を、九州の勢力が何度も東進を試みた史実の反映と解し、最後に成功されたのが神武天皇の東征・即位であり、それから十数代かけて国内統一が進展した、と説いておられる（著作集1・2、同別巻『私の古代史像』等、国書刊行会）。これこそ、まさに「神話から歴史へ」の道筋を立証されたものであり、更めて広く精読され深く検討されることを期待したい。（所 功）